

令和7年7月25日

会津美里町議会議長 大竹 惣 様

産業教育常任委員会委員 櫻井 幹夫

行政視察研修報告書

産業教育常任委員会行政視察研修について、下記のとおり報告します。

記

- 1 視察日程 令和7年7月9日（水）～ 11日（金）
- 2 視察地
 - ◆栃木県壬生町 道の駅みぶについて・みぶブランドについて
 - ◆群馬県上野村 森林資源の活用について
 - ◆栃木県益子町 城内坂通りを中心とした賑わい創出について
- 3 報告事項

栃木県壬生町の人口は約4万人で40年前とほぼ同じです。この数字は本町の約2倍で本町の40年前とほぼ同じ水準です。首都圏から近いという立地条件はありますが、人口減少が問題化している昨今においては驚きの数字と言えます。なぜそうなったのか、それこそが本町の取り組むべき見本と言えます。それは、地域の特性を活かすこと、そのための取り組みを行政が主体となって取り組むことです。壬生町の場合、国体の会場の選出や北関東道路の開通によるインターチェンジの設置という特質性がありますが、それを引き込むまでの様々な取り組みの成果と言えます。本町においても、すでに磐越自動車道のスマートICが設置されており、町の計画においては新鶴地域（ふれあいの森周辺）の整備が行われようとしています。壬生町同様に積極的な先行投資を行い、来るべき好機に備えた行政のリーダーシップが求められます。まずは、きちんとした将来像を描き、そのための中長期計画をしっかりと進めていくよう提案します。

群馬県上野村は人口が千人にも満たない小さな村です。多い時には5千人もいたそうですから驚きです。しかし山深い小さな村がなぜ多くの人から注目されているのか。行って見て感じたことは、山に入れば入るほどどこかで見た光景が広がっていることでした。それはまさに本町の山間地の峠道にそっくりでした。しかし、さらに進んで行くとそこは全く違っていました。山頂部には、木質ペレット製造工場や木質バイオマス発電施設があり、さらには、バイオマス発電を利用したキノコセンターがありました。また、木質ペレットは町の温泉施設のボイラー燃料に使われていました。そのすべてが当初は村営でした。当然にその当時は赤字状態ではありましたが、その後、

民営化を推し進めることで経営改善が図られ、今では採算が見込める状態になっています。途中でやめたり投げ出したりしてはその効果は得られません。しかし、きちんとした信念と緻密な計画が無ければ継続することは容易ではありません。本町と比較をしてみると、これまでの計画や取り組みに大きな差はないと言えます。しかし、今現在の状況は明らかに違います。町営の事業は愚か、民営化された事業也没有ありません。上野村も本町も森林の面積はほぼ同じですので、上野村と同程度の事業は行えたはずで、今からでも遅くはありません。いやむしろ今から取り掛からなければ手遅れになります。会津美里町森林資源活用ビジョンを確実に実行していくこと、そのための必要な予算の確保、人材の確保に努めるよう提案します。

栃木県益子町は人口およそ2万人で40年前とほぼ同じです。本町の人口1.8万人と同程度ですが、40年前との比較では本町の方がはるかに多かったことが分かります。人口同様益子焼の窯元は160件あるのに対して、本郷焼の窯元は12件です。当初は100件以上あった窯元がなぜこれほどまでに減少したのか。視察をして感じたことは、益子焼（益子町）は商業の町で本郷焼（会津美里町）は工業の町であるということです。益子焼の陶器市には600件以上のテントが並び全国から売り手が集まるとのこと、益子焼でないものが数多く販売されているのです。一方、本郷焼の陶器市は、75件のテントで大半は地元の野菜の販売テントです。これでは陶器市なのか、普通の朝市なのか判りません。今回の視察でお世話になった益子町観光協会の事務局長神田智規様、有限会社陶庫の代表取締役塚本倫行様から、これからの益子焼と本郷焼の交流のお話をいただいたところですので、まずは、行政の担当者が陶器市に出店（本郷焼窯元同行）して、交流を図るとともに益子焼の陶器市の状況を視察することを提案します。

令和7年7月25日

会津美里町議会議長 大竹 惣 様

産業教育常任委員会委員 小島 裕子

行政視察研修報告書

産業教育常任委員会行政視察研修について、下記のとおり報告します。

記

- 1 視察日程 令和7年7月9日（水）～ 11日（金）
- 2 視察地
 - ◆栃木県壬生町 道の駅みぶについて・みぶブランドについて
 - ◆群馬県上野村 森林資源の活用について
 - ◆栃木県益子町 城内坂通りを中心とした賑わい創出について

3 報告事項

○ 道の駅みぶについて

道の駅とは、安全で快適に道路を利用するための道路交通環境の提供と、地域のにぎわい創出を目的とした施設であることから、休憩機能・情報提供機能・地域連携機能の3つが必要とされる。現在道の駅みぶは災害時の避難場所、情報発信基地、大規模災害の復興支援施設となる「防災道の駅」に選定され、防災機能の整備、強化が図られている。また、国では、地方創生、観光の拠点として活性化することを目指していることから「防災道の駅 みぶ」に向け駐車場や農産物直売所等のリニューアル工事が進んでいる。

- ・平成21年7月に登録された総面積52.4haの日本一広い道の駅は、栃木わんぱく公園（県管理）と壬生町総合公園（壬生町おもちゃ博物館・壬生ハイウェイパーク含む）からなり、すべて都市公園である。
- ・高速道路と一般道の両方からアクセス可能なハイウェイオアシスとして、自然豊かな公園内には陸上競技場をはじめ、カヌー体験ができる湖、農園、虹の広場ほか充実した遊具施設がそろっており、何度でも遊べる子育て世代に人気の道の駅である。
- ・おもちゃ博物館は屋内アスレチックや0歳から遊べるおもちゃ広場として、集客を図り滞在時間を延ばすため、展示場の中央でおもちゃ遊びができるように展示場所をアレンジし、お気に入りの電車を走らせるジオラマや運転席を設置するなど工夫を凝らしている。また、1,960年代に玩具工場を誘致した工業団地内に“おもちゃのまち駅”や“おもちゃのまち郵便局”が誕生した歴史を、約9,000点もの展示品から学ぶこともできる。
- ・令和6年7月第三セクターを立ち上げ、今年度より指定管理を株式会社La chic

mibu(ラシックみぶ→みぶらしく)に委託。

○ みぶブランドについて

- ・ 壬生町の特産物は、米、ニラ、イチゴ、(ふるさと納税返礼品で人気のとちおとめ・とちあいか)、かんぴょう(生産日本一)等、優れたものがたくさんあっても、町内外に周知されているとは言えない課題があった。
- ・ 町内の優れた産品を「みぶブランド」として認定し、PRすることにより地域内外の消費者からの評価を高め、町の経済発展及び知名度向上を目的としている。
- ・ 認定に当たっては、新生産品等の要件、基準、を定め認定審査会が認めたものを「みぶブランド」として認定している。(認定数 22 事業者、35 品)

所感——この先進事例から我が美里町の特産物を磨き上げ、美里ブランドとして認定することは町内生産者にとって作る励みと誇りになるのではないだろうか。先ずは少ない種類からでも自信をもってこれが美里ブランドとアピールし、遠くない将来に町のブランドを確立したい

○ 森林資源の活用について

上野村は現在 45%が 65 歳以上である。過疎化を食い止めるため、1965 年から 40 年にわたり任期を務めた村長自らリーダーシップをとり、森林資源を生かす地方創生をいち早く行ってきた。2030 年度までに家庭電力を再生可能エネルギーだけで賄う計画を進めている。また、現在人口は 990 人となっているが、平成元年から若者の定住対策に全力を注いできたことで、人口の 21%の 208 名が I ターン者(平成元年以降の移住者)であり、さまざまな場面で活躍している。

- ・ 村長の山主に利益を還元したいとの思いから林業の六次化に着手。高齢化と人口減少による人手不足で、森林資源を放置していた未利用材に着目。燃料となる木質ペレットを年間 1.600 t 製造(2011 年稼働)し半分を村営の木質バイオマス発電施設で使用。その他温泉や福祉施設のボイラー・公共施設や家庭ストーブの燃料になる。(すべて村内使用)
- ・ 木質バイオマス発電施設から民間企業運営の「村きのこセンター」(村の出資・設立)に使用料の半分となる 180 k w の電力と温水を供給(長さ 20m のビニルハウス 40 棟)
- ・ 「村きのこセンター」は今後、廃菌床を乾燥させ、コークスにする企業に販売でき、産業廃棄物を資源に変えた。
- ・ 総面積の 96%を占める森林からエネルギーの地産地消を目指し、木質バイオマス燃料の活用(チップ・発電)、薪ストーブ導入、住宅照明の LED 化、ソーラー温水器導入、省エネ機器等買い替え、太陽光パネルと発電機の設置(村内の 8 割)、電気自動車の購入など多数の補助事業から脱炭素に向け利用拡大に取り組んでいる。

所感——バイオマス発電の成功には自然エネルギーの指導者との出会いがあったことは大きな要因である。環境省の「脱炭素先行地域」に選定されたことで、補助事

業も拡大しているのだろう。しかし、必然とも思われるが、いち早く森林再生に着目され、合併を受け入れずに、村民が誇れる村を残すと決め、次の経済を考え長期的な維持発展に努めてきたことは、美里町の今後の町づくりに対する姿勢の鏡とすべきである。

本町においても昨年2月28日にゼロカーボン宣言を行っていることから、町民の意識を変えていくために、森林資源活用に向けもっと積極的に取り組んでいかなければならない。

○ 城内坂通りを中心とした賑わい創出について

益子焼の歴史は1853年、益子町根古屋に良質な粘土が発見されたことが始まり、主に台所用品等を製造していた。大正時代に後の人間国宝浜田庄司が益子に定住し、民芸運動とともに益子焼に影響を与え生活用品から美術品や工芸品の製造窯元は400（町の窯元は200超）となり、1979年には国の伝統工芸品に指定を受け、多種多様な作品を求める陶器市（春秋2回）は販売店約50店舗と約600のテントが立ち並ぶ。

- ・陶器市のイベントとして、1月からテーマを変え年間8回開催している。
- ・現在益子駅から城内坂通り（歩道と電線地中化の整備）までの旧本通り1Kmを活性化へむけ、「本通り協議会」を設立（観光協会）し、空き家への店舗誘致等を行っている。
- ・DMOましこラボ設立（観光協会）により令和4年「土のガストロノミー事業」、令和5年「高付加価値改修事業」、令和6年「陶器市オーバーツーリズム対策事業」などに取り組んでいる。
- ・「益子焼を使おう条例」を平成29年に制定しプロモーションに取り組んでいる。意識は出て来ているが大きさをそろえるなどに課題がある。町民は買うというより記念品として頂くものとの意識が昔からある。

所感——この多様な益子焼には、経済産業大臣認定の国家資格を有する益子焼伝統工芸士がおり、古くからの技を受け継ぎ、後世に伝えている。

城内坂通りは幅広い歩道と電線地中化でゆったりと滞在できるよう整備され、各店舗やギャラリーには多種多様の益子焼が目を楽しませてくれ、つい手に取ってみたくなる。

本通りから城内坂通りへと人の流れが移った訳が、昭和から令和へと時代が流れる中で求められる商店街の違いが隣り合わせになっていた。本町のまちなかにぎわい創出の課題解決へのヒントが隠されているように思える。

以上

令和7年7月22日

会津美里町議会議長 大竹 惣 様

産業教育常任委員会委員 荒川 佳一

行政視察研修報告書

産業教育常任委員会行政視察研修について、下記のとおり報告します。

記

- 1 視察日程 令和7年7月9日（水）～ 11日（金）
- 2 視察地
 - ◆栃木県壬生町 道の駅みぶについて・みぶブランドについて
 - ◆群馬県上野村 森林資源の活用について
 - ◆栃木県益子町 城内坂通りを中心とした賑わい創出について
- 3 報告事項

◆栃木県壬生町 道の駅みぶについて
総面積は52.4haで壬生PA・みぶハイウェイオアシスに連結した憩いの総合公園となっている。栃木県広域災害対策活動や広域物資の拠点となっており、「防災道の駅」として認定を受けている。

提言・・・・・・観光や物販の道の駅を含め、災害が頻発し、激甚化する中で、防災機能を有した施設を兼ねた公園が必要である。

みぶブランドについて

壬生町に優れたものが多いが、町内外に周知されていないためおすすめの地域産品などを厳選して「みぶブランド」として認定し、PRしていくことにより、壬生町のイメージを高め、地域の活性化につなげていくこととした事業である。

まとめ・・・・・・町の産品がブランド化する生産品、製造品、加工品等を調査し、認定基準を設け、申請産品などの要件を満たし審議会で認定することで町の経済発展および知名度向上につながる。

◆群馬県上野村 森林資源の活用について

上野村の人口は990人、その内1ターン者が2割を占めており、さまざまな場面で村づくりに活躍している。歴代首長の発想により、森林資源を100%活用し、そこに所得及び雇用を生み、村内経済を回している。また、脱炭素事業カーボンニュートラルに向けて、民生部門の電力消費に伴うCO₂排出実質ゼロの取組みを実施している。



上野村きのこセンター



上野村木質バイオマス発電施設

まとめ・・・施設整備などは、国県の補助金を活用した村直営の森林資源を活用した循環型が魅力であり、理想的な事業である木質バイオマスの利用が必須と考える。

◆栃木県益子町 城内坂通りを中心とした賑わい創出について

DMOましこラボを設立し、益子焼に関するイベント活動は、観光公式インスタグラムで情報を発信し、リピーターを獲得して町の中での回遊性を高めるなどを目的として情報発信している。今後はオンライン旅行代理店（OTA）を活用した体験プログラムの造成やインバウンド強化、古民家ホテル経営などを検討している。また、陶器市イベントを年間通して開催している。

まとめ・・・DMOを設立し、行政および光協会が協力して町の特徴を生かし、NSNなどを活用して情報を発信し、イベントを開催することが必要である。

令和7年7月24日

会津美里町町議会議長 大竹 惣 様

産業教育常任委員会委員 鈴木 繁明

行政視察研修報告書

産業教育常任委員会行政視察研修について、下記のとおり報告します。

記

1 視察日程 令和 7年7月9日（水）～ 11日（金）

2 視察地 ◆栃木県壬生町 道の駅みぶについて・みぶブランドについて
◆群馬県上野村 森林資源の活用について
◆栃木県益子町 城内坂通りを中心とした賑わい創出について

3 報告事項

◆栃木県壬生町道の駅みぶについて・みぶブランドについて

（道の駅みぶについて）

地域の賑わい創出を目的とした施設で地域とともに作る個性豊かな賑わいの場の基本コンセプトにしている。

全体で52.4haの広さがあり、その一部14haが平成3年に町が運動公園をつくる予定の場所を県の交流事業に指定されて事業費の負担額が削除された。

おもちゃ博物館については、竹下元総理の「ふるさと創生一億円事業」を活用した。

道の駅には次の3つの機能 ①休憩機能、②情報提供機能、③地域連携機能が必要である。

そこに国では2025年までを目標に道の駅の防災機能の整備、強化に対して交付金をつけBCPの策定や、防災訓練のノウハウ支援が行われることになっている。

（みぶブランドについて）

壬生町内の優れた産品をみぶブランドとして認定し、情報発信を行うことにより地域内外の消費者からの評価を高め、壬生町の経済発展及び知名度向上を目的としている。

今後は補助金を活用し、販売所の拡張や加工所をつくり、生産量の多い、イチゴ、ニラ、トマトの加工で販売額の増額を目指していく。

◆群馬県上野村森林資源の活用について

村の総面積の97%が森林で高齢化や、人手不足で切り倒された木は森林にそのまま放置されていた。

この未利用材の有効活用に村は着目、燃料として木質ペレットを製造・使用し、エネルギーが地産地消される循環の仕組みに着手した。

平成11年に木質ペレット工場が完成し、年間1,600トンのペレットを生産して木質バイオマス発電所へ半分以上出荷している。

又、発電所からは、民間企業が運営する「村きのこセンター」に180キロワットの電力を供給している。

ペレットはこれ以外に温泉や福祉施設のボイラーをはじめ公共施設や家庭のストーブの燃料として使用されている。

村の人口は990人でそのうち21%の208名が1ターン者で、村づくりの様々な場面で活躍している。

林業やペレット製造、キノコ栽培のなどで150人の雇用が生まれた。

それぞれの施設で働く従業員は安定した仕事と収入を確保し、関連事業の経済効果は年12億円に上り、これは村総生産の4分の1に当たり地域経済を支える基盤になっている。

その他、村内の全500戸のうち8割の403戸に国の補助金を使い太陽光発電と蓄電池を設置する予定。

◆栃木県益子町城内坂通りを中心とした賑わい創出について

城内坂通りが整備されたのが30年前で、歩道ができ電線地中化が実施された。

DMO ましこラボ設立して5年目で、目的は陶器市以外の日常の集客、観光公式インスタグラムで情報を発信し、リピーター獲得、町のなかでの回遊性を高めるなどを目的として情報発信している。

令和7年7月21日

会津美里町議会議長 大竹 惣 様

産業教育常任委員会委員 12 番 横山 知世志

行政視察研修報告書

産業教育常任委員会行政視察研修について、下記のとおり報告します。

記

- 1 視察日程 令和7年7月9日（水）～11日（金）
- 2 視察地 栃木県壬生町 道の駅みぶについて・みぶブランドについて
群馬県上野村 森林資源の活用について
栃木県益子町 城内坂通りを中心とした賑わい創出について
- 3 報告事項

道の駅みぶにあつては高速道路沿いという事もあり、高速利用者も一般道利用者も利用できるという利便性が特に良く、立地条件が効果を生み出しているものであった。また、周辺は県立公園と町立公園が融合し、膨大な敷地面積の中に各種の施設を建設していた。

見学したのは「おもちゃ博物館」を視察したが、もともとこの地区は東京にあったおもちゃ作りの工場群が集団移転した歴史があり、おもちゃの町として発展してきたものであり、その面影を売りにしている施設であり、マニアにはたまらない施設であろう。道の駅そのものは特にこれといった特徴はないが、県と町が融合していることで成功しているものであろう。はたしてわが町に活用できるかは疑問が残る。

群馬県上野村の森林資源の活用を視察したが、確かに森林資源を有効活用していることはうかがえた。人口が1000人規模の山林に囲まれた村だからこそできることではないだろうか。木材チップ工場やバイオマス発電にしても莫大な経費が掛かっているが、村長が各種の補助金を模索して活用したとのこと。あらためてリーダーの強い信念や決断力を垣間見た気がする。本町でも森林事業が活発すれば、同様の事業も活用できるかもしれないと感じた。森林組合や事業者と町が一体となって森林開発を活性化できれば、鳥獣被害防止や雇用も増え森林資源を有効活用できるものと思う。

益子町は陶器の町として有名ではあるが、城内坂通りの街中はあまり賑わいがあるとは思えなかった。店舗は開けているが通りを歩く人の姿はまばらで、車の往来も驚くほどなかった。しかし食事をした店は満席で、外には待っている方が多くいたのには驚いた。どこからこんなに集まったのだろうと不思議であった。陶器は今では日用品ではなく、美術品の部類になっている。歴史を守る伝統工芸を生業とするには難しいものがあるだろう。本郷焼にしても窯元が減って事業継続が厳しくなっている。焼き物の里として生き残るために、どうしていけばいいか、窯元はもちろん地域や行政が連携して伝統工芸を守るべく調査研究をして行かねばならないと思う。

以上報告します。

令和7年7月23日

会津美里町議会議長 大竹 惣 様

産業教育常任委員会委員 横山 義博

行政視察研修報告書

産業教育常任委員会行政視察研修について、下記のとおり報告します。

記

- 1 視察日程 令和7年7月9日(水)～11日(金)
- 2 視察地
 - ◆栃木県壬生町 道の駅みぶについて・みぶブランドについて
 - ◆群馬県上野村 森林資源の活用について
 - ◆栃木県益子町 城内坂通りを中心とした賑わい創出について
- 3 報告事項

1) 壬生町。おもちゃ博物館の運営や経過を知ると
高度成長期の製造の変化も知らされた。
。道の駅の運営は高速利用者を中心に
作られている。
。広い管理地は、県との協同運営と知り
納得した。町の運営は十分とはでき
ないと考えられる。

2) 上野村の森林資源活用

現在の運営は当初計画も忠実に実行されている。森林資源の活用とは、森林はもとより生産活動を一環作用として実施している。森林再生→人的育成→生産物（パレットや木工生産）を~~生産~~生産と木材を又発電にしても、その利用を十分に発揮されている。

3) 益子町

賑わい創出の実行者は、町の再生も考えて活動されている。その内容によつて新旧の考え方があつたが指導者と商工会が上手に利用し合つていた。

〔総括〕

「どの事業も行政や団体の先を以てした行動を忠実に実行しており、この進め方はどの町でも十分に考慮すべきである。」

令和7年7月24日

会津美里町議会議長 大竹 惣 様

産業教育常任委員会委員 根本 謙一

行政視察研修報告書

1. 視察日程 令和7年7月9日（水）～11日（金）
2. 視察地 ◆栃木県壬生町 「道の駅 みぶ」について・「みぶブランド」について
◆群馬県上野村 「森林資源の活用」について
◆栃木県益子町 「城内坂通りを中心とした賑わい創出」について

3. 報告事項

【道の駅 みぶについて】

道の駅には三つの機能「休憩機能」「情報提供機能」「地域連携機能」が必要要件である。H5.4.22 全国103か所の登録から開始され、現在では全国で約1200駅が登録されている。そして、H16.10 発生の新潟中越地震の際には避難場所ともなり、被害情報や安否確認など情報発信地として利用され新たな機能として注目された。更に支援者ボランティアセンター、援助物資の配給拠点など、大規模災害の復興支援施設としても利用されたことで、H19.3 防災拠点化や機能の多様化などの方針が加えられた。そして、H18.9 関東地方で国道50号線沿の東北道佐野藤岡インターから1kmの位置の「道の駅みかも」が防災機能拠点として整備され、現在全国で79駅を「防災道の駅」として初認定し整備強化が図られている。国ではこの「防災道の駅」を『地方創生・観光の拠点』として活性化を目指していて、その取り組みとしている。

「防災道の駅 みぶ」は栃木県営の「とちぎわんぱく公園」37.2ha、H7.5 ふるさと創生1億円で整備され始まった壬生町営のおもちゃ博物化含む「町総合公園」11.4haと「ハイウエーオアシス」としてスマートICの計画ある『みぶハイウエーパーク』3.8haが全体52.4haを構成していて、H21.7 登録の広大な都市公園「道の駅」である。年間300万人超の入場者がある。現在は第2期リニューアル工事整備中で、6年度整備として「トイレ等整備」「管理等整備（加工所・事務所）」「シルバニアショップリニューアルオープン」、7年度整備として「物販・カフェ」「飲食施設・多目的スペース複合施設」「農産物直売所」「一般道側と高速側駐車場増設」が進められていて、全ての工事費の補助率が1/2の交付金が活用されている。

『考察』

昨年の視察地群馬県川場村の「道の駅田園プラザ」とは趣を全く異にしていた「防災道の駅 みぶ」は、日本一の広大さからその機能の一部を見ることしかできなかった。立地環境の好条件を活かし国の交付金を有効活用しつつ、R7.4より厳しかった運営体制を物販のテナント制から第三セクターで指定管理として全てを一括管理にしてステップアップを図ろうとしている。社長の説明において特産品のイチゴなどの加工品開発に注力しつつ、ここを目的地化することで滞在時間の延長を図ろうとして、売上向上の環境整備を進めていることは理に適った方向性と理解できる。全国的にも大変に珍しい多様な機能によって集客を図れる「防災道の駅 みぶ」の経営に強い意欲を感じる応答であった。本町に生かすエッセンスとしては魅力ある人を呼べる核の構築が必須であることであろう。核とは勿論のことハードとソフトがあって、歴史性と地域性なくして成しえないことは再三言ってきているところだが理解されて

いないのは誠に残念である。

【みぶブランドについて】

人口4万人を切っている壬生町において、この推進事業は首長の発想から生まれたとの由。全国に誇れる「地域資源」が多数存在していても、町内外に認知不足があり、お勧めの商品、製品、地域産品などを厳選して「みぶブランド」として認定してPRしていくことにより、壬生町のイメージを高め、地域経済の活性化につなげていくことを目的としている。和菓子から洋菓子、日本酒からお茶、漬物からジャム、豆腐に蕎麦、そして玩具類や和太鼓まで多岐に渡っていて現在21社35品が認定審査会において認定基準により厳選されている。

近年「壬生藩鳥居家四代藩主の御献立帳」の発見から、現代風に考案された「壬生お殿様料理・お姫様料理」が認定各店の個性を生かしながら提供されている。また、農産物（苺・トマト・ニラ）の差別化を図って命名した「みぶの妖精」をブランド化してきたが、JAの広域化により使用できなくなり、新たな取り組みを模索している。特産品は苺で「とちおとめ」から「とちあいか」に移り、「かんぴう」の生産は全国の9割とのことで驚きである。

『考察』

近隣自治体においても、地元産品の特産認定制度を活用して売り出してきているところがある。過去の行政視察研修でも学んできていたが議員個人提案の域を出なかった反省がある。一次産品に優れた農産物があっても、それらの加工産品化いわゆる六次産品化の取り組みが薄く、民間の開発に委ねっきりにしてしまっていないだろうかと考える。壬生町の事例は首長に地域を見据えたビジョンの提示とリーダーシップが必須なこと、行政の仕掛け方に示唆をいただいた十分な視察であった。

【森林資源の活用について】

現在人口990人、510世帯の群馬県上野村は開けた町場が少なく、周りに急峻な山々が迫っている川筋に家並が見え隠れしている集落風景の中に役場はじめ公共施設、そして国道沿いに「道の駅」・複合施設などあり、天空回廊(吊り橋)をはじめ観光資源の豊富さには驚きを禁じ得ない。上野村はそんな地域の生き方として合併を急がず自立の道を選択した。歴代の職員出身首長が村の総面積の95%を占める森林資源の利活用に生きる活路を定めて「地域経済循環」を目指した施策事業を展開してきた結果として、現在「上野村モデル」と言われる「森林資源を100%活用して、そこに所得と雇用を生み村内経済を回す」仕組みが構築され成果を見せている。12億円の経済を回し、150人の雇用を生んでいる。定住者の雇用場創出や子育て支援・UIターン施策の充実注力の結果として、Iターン者240人(村人口の20%水準)の実績は希望が湧く数値である。そのIターン者(現在地域おこし協力隊20名ほか)が村づくりの様々な場面で活躍をしている。木工房も多くあり若い工人が育っていて、木工品が豊かにある。

25年サイクルでの再生利用として、スギやカラマツなど針葉樹・広葉樹の活用では原木の供給において市場出荷や森林組合が住宅材に加工、木工品材料、選別した原木を木炭センターでの燃料炭化や土壌改良材生産、オガ粉工場からきのこセンターの床づくり材料、「エネルギーの地活」はホテル・温泉のペレットボイラー、一般家庭のペレットストーブ(100台程)他農業用ハウスや福祉施設の暖房である。一方で村の「脱炭素化事業」により一般家庭での太陽光発電化も進んでいてエアコン化も進んでいる。

〔木質バイオペレット工場〕

2011年より「エネルギーの地活」として設立稼働し、端材や未利用材(間伐材・広葉樹)などで年間1600t生産している。課題として供給能力はあるが異常気象や経費の増加があって経営的には厳しい。

〔浜平温泉しおじの湯〕

ペレットを熱源材とした沸かし湯の日帰り温泉であり、三々五々の観光客などの来客が在り食事処にもなっていて地元特産(村営特会 猪豚 500 頭)の「猪豚とんかつ」をメインにしている。

〔木質バイオマス発電施設〕

「エネルギーの地活」として、ドイツ製のガス化発電(小型熱電併給装置)を使って、ペレット燃焼発電を稼働している。ペレット工場の生産能力範囲内活用として整備され、180 kW規模により「きのこセンター」へ電力供給(熱供給・空調利用)されている。

〔上野村きのこセンター〕

産業振興と雇用促進の両面から平成 11 年に開業し、H23~24 に規模拡大の新きのこセンターを整備、現在売り上げ約 3.7 億円、雇用户 50 名(外国人 6 名)で経済面・雇用面においても村内の中核を担う事業体である。ここ 2 年ほどで経営の黒字化が見えてきている。

『考察』

「エネルギーの地産地活による創生戦略」により小さな村の大きな挑戦は続いている。村予算が 43 億円(東電の固定資産税が大きい)はかなりの額であり、脱炭素事業計画予算にも 26 億円と共に驚きである。そして、数々の事業体を村の 7 つの特別会計によりしっかりと管理運営していることは重ねて驚きであるが、公営であるが故に維持継続できたとも言える上野村ならではのビジョンと覚悟と知恵の成果と考える。肝心である実施体制として官公庁等行政機関との連携、第三者評価機関との連携、住民との連携、そしてフォローアップの方法としては事業ごとの振り返り・検証を行い、有識者会議や調査機関、シンクタンク等による事業内容や事業効果を測定するとともに、パブコメで村民の評価を反映していくことで改善し、事業を効果的かつスピーディーに実施していくとしている。私が一番気になっていた経営的資質ある人材確保については特段のハンティングはなかった。現場内容熟知首長のリーダーシップが大きいこと、担当職域の広い村職員と現場社員がその信頼関係の中で一体的となってプロ意識の向上と働く若者の生きがいを生み出している施策充実のことが窺い知れる応答であった。真に「株式会社上野村」と言えるところを目の当りにしてきた学びの多い驚きと感動の視察であった。

【益子町城内坂通りを中心とした賑わい創出について】

益子町は人口約 2 万人の町である。益子焼窯元と販売店舗全体売上げは 3 年に一度の調査によると 1997 年が最高で 400 軒 94 億円、そして 2022 年には 300 軒ほどで 19 億円となってしまう。正にコロナ禍の影響であろうから益子焼とて例外ではなかった。春と秋開催の陶器市は 1966 年・昭和 41 年に民営の共販センターが開店、その前で「陶器の B 級品処分市」としてスタートした。現在は 700 軒ほどの出店があり町の一大イベントに成長した。その陶器市開催会場となっているのが城内坂通りで。

城内坂通りの区画整理事業は約 30 年前、舗道ができ電線地中化で整備、現在その延伸が検討されている。S30 年代の民芸ブームを経て、S41 年に民営の共販センターができたことで画期的に観光客の流入が増え、焼き物店も増加する中で利害の一致となって区画整理事業は進んだ。

城内坂通りは何もしなくても人が来ている現状があるが、賑わい創出の取り組みとしては、R3 年にプロモーション役の観光協会とは別組織の稼ぐ組織として「DMO ましこラボ」ができ、共同による観光庁の補助事業を申請した。R4 年は土と風土・文化・伝統・智恵・地元食をテーマに「土のガストロノミー事業」、R5 年「高付加価値改修事業」、R6 年「陶器市オーバーツーリズム対策事業」「ましこ炎のまつり事業」を実施、R7 年は『かさましこ』として「ツアー造成補助金」を申請中である。

また、陶器市等のイベント以外の日常的な集客の工夫・取り組みについては、「DMO ましこラボ」として観光公式Instagram(フォロワー6万人で全国自治体4位、予算100万円)で情報発信し、リピーターの獲得、街中での回遊性を高めるなどのために情報発信をしている。今後はオンライン上で宿泊施設の予約を受け付ける旅行代理店「OTA」を活用した体験プログラムの造成やインバウンド強化、古民家ホテル経営などを検討中である。そして、陶器市の分散化を模索中であるほか、4月に小宅古墳桜まつり、6月にましこ de ミート、7月に手筒花火、8月に益子夜市とひまわり祭り、9月に恵比寿ガーデンプレスミニ陶器市、1月に登り窯プロジェクト、3月に円道寺さくらまつりなど年間を通してのイベントを開催している。

一方で、城内坂通りに繋がる旧中心市街地であった寂れてしまっている本通りの活性化については、地方創生の取り組み組織として協議会ができています。2009年から3年に一度の「土祭(ヒジサイ)」を5回開催し、陶器市だけでない新しい益子の形町づくりをと首長肝いりだったが、核になっていたプロデューサーが2回目後に亡くなり、コロナ禍もあって中止状態となっている。更には時代にたがわず空き店舗が増え、誘致活動中で小さなお店は増えてきているが厳しい状態にある。

2012年に東京秋葉原と笠間・益子をつなぐ「高速バス焼き物ライナー」が運行されるも、現在は上京用となっている。R2年笠間市と共同で日本遺産に認定、構成文化財として中世の寺社仏閣文化財と焼き物関連施設が入っている。管轄が生涯学習課となり、観光焼き物振興の側面が弱まった課題があったが、R7年度5周年事業として「登り窯プロジェクト」を実施、東京渋谷においてプロモーションイベントも開催予定である。今年度の利便策向上としてはシェアサイクルの導入(15台 予算約200万円)を予定している。今までのレンタルサイクルをアプリで予約決済できるシステムにする取組みである。

『考察』

初めて訪れた益子焼の町、区画整備された城内坂通りに入ると軒並ぶ焼き物店に圧倒されながら研修会場の「陶庫」(元肥料店50周年)に入る。様々な陶器が日用雑器風ではなく作品・美術品宜しく蔵造りのような改造された古店舗の中での、丁寧にレイアウトされた陳列に言葉を失うほど目を見張った。

正に焼き物の産地である。「何をしなくても人が来る」はずである。陶器市年間来場者60万人であり、それ以外の入込人数は如何程になるものか。多様な飲食店も多く、昼食を摂った古民家を活かしたレストランでは満席近く賑わっていた。

圧倒的な窯元数と焼き物店の作品種数、その礎を築いた陶芸家濱田庄司の作品を目の当たりにしてきて何を学ぶべきかに迷ってしまった。若い後継者が残っていること、意外に多くの女性作家や新進作家の斬新な作品が展示・販売されていることから底堅い産地ボリューム感を窺えた。「益子焼をしよう条例」を制定して地域密着を図り飲食店での使用促進策は参考になる。本町においての会津本郷焼後継者育成事業は「地域おこし協力隊制度」に注力している。会津本郷焼窯元減少が顕著な現実が厳しい中、新しい挑戦者を地域挙げて応援・育成していく取組み・仕組みの施策充実はより重要と考える。

観光協会とDMOとの在り方には疑問を持ったが、役割は棲み分けており地域性と受け止めた。本町観光協会のDMO化に向けての計画は頓挫気味であることから、時代を見据えた人材の確保が肝要であると従前より唱えてきたことを確信してきた。行政との信頼関係に基づく緊密な連携は言わずもがなであり、それなくしての地域産業振興は考えられない。その意味においても「井に中の蛙」ではいけないと、この度の視察研修においても思い致させられた有意義な見聞であった。それにしても、益子焼は一日を使って視察研修すべきところではなかったかと、半日足らずの駆け足視察が残念でならなかった。